

第1回 鳴瀬川総合開発事業の関係地方公共団体からなる検討の場
第1回 筒砂子ダム建設事業の関係地方公共団体からなる検討の場

－ 議事概要 －

- 開催日時 平成22年11月19日(金) 10:10～11:25
- 場所 大崎合同庁舎 1F 大会議室
- 出席者
 - 構成員 石巻副市長(市長代理)、東松島市副市長(市長代理)、大崎市長、松島町長、色麻町長、加美町長、涌谷町長、美里町副町長(町長代理)
 - 検討主体 東北地方整備局長、宮城県副知事(知事代理)
- 討議概要
 1. 検討手順の概要(案)について
 - 主に資料3及び参考資料4により事務局から説明
 2. 討議
 - ・ 鳴瀬川は治水と利水の期待の強いところであり、この後の方向がどうなるのかと固唾をのんで見守っている。早く進めてもらいたいという期待と同時に、また検証かと、一体どうなっているのだと言うことへの不満、不信、怒りということが非常に高まっている。
 - ・ 国と県が合同で実施されたことは、非常に適切な判断だと思っている。
 - ・ これまで、治水利水対策において、国・県の政策に何度も翻弄され続けてきた。両ダムがH19年に河川整備計画に位置付けられ、後は進むだけだと期待していた。
 - ・ この地域は、全国でも珍しい国営かんがい事業4地区が集積した一大穀倉地帯であり、国営かんがい施設は既に完成している。今年から利水者に支払い義務が生じているが、必要な水源が確保できておらず、「水は来ない。しかし金は払うのか」ということで、まさに農民一揆が起きようとしている状況である。
 - ・ 鳴瀬川は、特異な整備歴史があって、整備計画の背景があって、最も検証を急がなければならない。検証後は、一気に作業を進めていただけると期待している。
 - ・ 中止といわれた八ツ場ダムは来年の秋までに検証を終えるということであるが、熟度が高い鳴瀬川のダムに対する検証には、それほどの期間は

不要と思っている。いつまで検証がかかるのか明確なスケジュールをお聞かせ願いたい。

- ・これまで培ってきた歴史的経緯、何十回にもわたる協議を経て、ダム建設が必要であるとの方向で来た。
- ・下流にダム等を造っても意味がない。下流域の人たちとの情熱、熱意に共鳴をして加美町にダムを造るという合意がなされてきた経緯があり、そのことを重く感じて進める必要がある。
- ・見直し検証の指示の問題に、これまで積み重ねてきた鳴瀬川流域の人たちの想いをもう一度再認識をする機会になるだろうと思ひこの会に臨んでいる。
- ・パブリックコメントも当然必要であるが、地権者の想いを抜きにして検討を進めることはできないと思っている。
- ・江合川の上流には鳴子ダムが完成し、水田を潤し観光にも活用され、生命財産を守ることで、住民は非常に喜んでいる。
- ・水田あるいは住宅等々をダムによって守り続けられてきた。堤防は地盤沈下が心配であり、河道掘削は掘っても必ず元に戻るのではないかと心配している。
- ・洪水など過去の経験者として、大崎耕土を守り抜く使命感を持って、頑張ってきた。悠久の課題としてダムあるいは鳴瀬の改修が一日も早く完成することを国、県にはお願いしたい。
- ・大崎全体、流域全体として考えて行く中で、早く対策を講じていただきたいと言うのが率直な要望です。
- ・検証は、技術的、理論的にやっていくのか不明なところも多いが、これまでの方向で作業を進めて頂き、早く完成形に近づけて頂きたい。
- ・理論付けについては、これまでの実績とか研究の結果の蓄積等をできるだけ早く整理し、これまでの流れを切らない様にして欲しい。
- ・これまでの歴史や関連する事業の進捗等々を総合的に勘案した上で、一刻も早く結論を出して、治水、利水が総合的に進むようお願いしたい。
- ・具体的には、次のステップで話をしていきたい。
- ・鳴瀬川の最下流の町である本市も、他の市長、町長と同様に重大な問題だと捉えている。
- ・S 6 1 年の洪水では上流の鹿島台において破堤があり、住民は洪水への心配を持っている。一言言わせて頂ければ、ダムを造って欲しい。
- ・検討の場ということであるので、果たしてダムに代わり得る対策はある

のか、ダムが無くとも確保できる方法があればそれに越したことはないが、ダムに勝る方法があるのか不安や疑念もある。必ずやダムでなければとの思いはないわけではないので、十分に、早急に検討していただき、良い方向に持って行けるよう期待する。

- ・ 本地域は、辛く厳しい水との関わりの歴史の中で、これまでいろんな整備計画を立てられて来たと理解している。
- ・ 現在までに小規模な改修は行われてきたが、究極の治水、利水を考える場合、ダム一つを議論してきたわけではなく、大崎耕土全体での計画として議論をしながら計画を積み上げてきた。これまで造り上げてきた計画を大事にして、今後の検討の場を進めて行かなければと思う。

(平成 22 年 12 月 3 日 事務局とりまとめ)